

日本葉書会

一日露戦争期における絵葉書ブームと水彩画ブームをめぐって

向 後 恵 里 子

はじめに

「美術」はそもそも、「社会」や「恋愛」という言葉と同様、明治時代に翻訳された新しい言葉である。はじめて「美術」の語が用いられたのは、1872（明治5）年のウィーン万国博覧会への出品分類のためであった。それ以来、様々な言説や制度の形成を経て、世紀転換期を迎えるころには絵画・彫刻を主とする現代の「美術」概念が一般に浸透してゆく¹。とりわけ、1900（明治33）年パリ万国博覧会のための、初の体系的な日本美術通史 *Histoire de l'Art du Japon*（『稿本日本帝国美術略史』）²編纂事業と³、1907（明治40）年における官設美術展覧会「文部省美術展覧会」の開始は、「美術」をめぐる言説と制度の整備を強く押し進めるものであった。

「美術」という言葉は明治後期には相当な広がりを見せており、その氾濫ぶりは、画家中村不折が『画道一斑』のなかでもらしている以下の苦言からも十分に察することができる。

美術御仕立物所，美術御歯磨，美術御化粧品，こんな看板が東京の町に沢山ある。そんなに美術といふものゝ範囲は広からうか⁴

洋画家中村不折は、1906（明治39）年に日本葉書会から出版された『画道一斑』において、巷に広がる「美術」という言葉に警鐘を鳴らしている。不折は「美の解釈の誤りから、続いては美術といふ名義を濫用して、何んでも一寸小奇麗なものがあると、すぐに美術だといふので、美術石鹸、美術洗濯などといふ奇怪な美術があらはれて来る」という。不折の論は、真の「美術」とは何かという話へ向かうのだが、ここでは「美術」という言葉の氾濫に注目したい。

こうした趨勢と呼応するかのように、この時期には「美術」のなかでも、とりわけ洋画に対する興味関心が高まっている。1906年の『早稲田文学』では、1900-1905年における美術界の趨勢として、「洋画趣味」の普及が指摘されている。

水彩画家として派を立つるもの、白馬会に三宅克己氏、太平洋画会に大下藤次郎氏、丸山晚霞氏

等あり、共に清新なる彩筆を以て自然の景を描く。此等の諸氏が力に依つて素人の水彩画家を生ずるに至り、洋画趣味はますます普及せらるゝやうになつた。之れと共に最近一兩年來◎絵はがきの流行を來たし、(…)之れに次いて尚ほ最近画壇の特色と認むべきは泰西名画の複製と、洋画に関する著書雑誌類の繁昌と、洋画の木版刷等で、是等は皆な洋画趣味の旺盛を示して居るのである⁵。

“水彩画”への注目と「素人」水彩画家の増加、“絵葉書”の流行、印刷出版など複製メディアによる洋画イメージの流通。この三点が、「洋画趣味の旺盛」を示すものであった。美術史家森口多里は、その様子について次のように回想している。

明治三十年代には、青年男女の間に洋画の趣味が段々と広まつて行つた。出版物による普及工作も盛んになつた。(…)〔石版・木版・写真網目版・原色網目版〕の製版家たちが洋画趣味普及の上に演じた功績をもまた見逃してはならない。(…)最も素人の近づきやすい水彩とスケッチとが多く青年男女によつて試みられるやうになり、作家もまた啓蒙運動に力を尽し、(…)水彩画法の冊子が刊行されて世の迎へるところとなつた。(…)水彩と相伴つて青年男女を惹きつけたのはスケッチであつた。彼等の間にスケッチは一の趣味的流行になつた。私共中学生だつた者はこれによつて教室での臨画から始めて開放されて野外の自然を略写する喜びを鼓吹された⁶。

冒頭の「美術御仕立物所」という商号の背景には、こうした世間における「美術」の広がりがあっただろう。西洋に由来し目新しく、青年間に流行していて、何か「一寸小奇麗なもの」。この「美術」という言葉が様々な商品名に冠された当時、「美術絵葉書」を発行し青年男女に非常に人気を博したのが、本稿で取り上げる日本葉書会である。

日本葉書会は、1904（明治37）年4月に設立された絵葉書・書籍の出版団体であり、多くの絵葉書を発行して人気をよんだことが知られている⁷。その絵葉書は今日でも多くのコレクションを飾っており⁸、この時期を代表する絵葉書版元の一つと言って良いだろう。書籍としては『ハガキ文学』と題された月刊機関誌を発行し⁹、また画家の手による美術書も刊行している。『画道一斑』もまた、そのうちの一冊である。

こうした様々な活動の記録が残るにもかかわらず、これまで日本葉書会や『ハガキ文学』を正面から取り上げた論考はほとんど見られず、言及されることも稀である。これにはおそらく、いくつかの理由が考えられる。まず、絵葉書についての調査研究は近年多方面から進められ、考察が重ねられているが¹⁰、出版元へ注目した考察はいまだ少ない¹¹。『ハガキ文学』自体に目を向けても、当代の文壇や画壇を代表するような位置を占めているわけではない。文芸誌・投稿誌としても、美術雑誌としても、類書の多い一雑誌にすぎない。

それでは、なぜ日本葉書会に注目するのだろうか。

日本葉書会の特徴は、青年・学生層を対象とし、絵葉書・雑誌・美術書など、視覚的媒体を中心とした出版活動を展開した点にある。また、全国的に多くの読者＝購買者を獲得し、経営的にも成功している¹²。同会の活動は、1900年代日本の青年・学生層において、いかに洋画趣味が関心をあつめ、受容・消費されたのかを探る一つの好事例であると考えられる。

本稿では日本葉書会の出版活動を概観したのち、絵葉書、水彩画という2つの側面から考察を加える。その様相は、この時代の「美術」受容の様相を、一般の人々の視点から理解する手がかりをあたえてくれるだろう。

1. 日本葉書会

大橋光吉による日本葉書会の創立

日本葉書会は、大橋光吉（1875-1946、図1）という一人の人物の手によって設立された。大橋は、明治末から昭和にかけて印刷業界で活躍した実業家である。その最大の功績は、今日に続く共同印刷株式会社の初代取締役社長を1925（大正14）年の創立から1946（昭和21）年の亡くなる直前までつとめ、経営発展の基礎を築き印刷業界を牽引した点にあらう¹³。

同社はそもそも、明治時代の総合出版社博文館の経営した印刷所に端を発する。大橋光吉は1894（明治27）年に20歳で大阪から上京し、博文館に雇われた。博文館は1887（明治20）年創業の新興出版社ではあったが、雑誌『日清戦争実記』の成功で発展の時運をつかんでいった。同社はのちに「博文館時代」とまで言われる雑誌王国の礎を築きながら、取次の東京堂・印刷の博進社工場・用紙の博進堂・広告の内外通信社など隣接業界に組織をととのえ、同族経営の網を拡張してゆく。大橋は1898（明治31）年に同館創業者大橋佐平の三女幸子と結婚し、同族の一人として同館の印刷工場博進社の総務部長をつとめることとなる¹⁴。

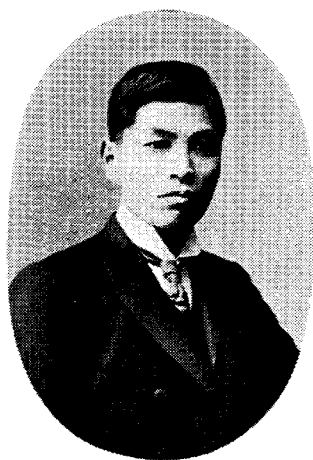


図1 大橋光吉（『大橋光吉翁伝』）



図2 日本葉書会同人（後列右から二番目が大橋光吉）
1905年（『大橋光吉翁伝』）

博進社に勤務しながらも、病を得てたびたび療養に赴いていた大橋は、その間に絵葉書流行の気運に触れていたようだ。そうしたきざしをとらえ、またおそらくは自身の関心から、日露戦争の開戦直後の1904年4月、博進社の位置する小石川区久堅町108番地に、大橋は日本葉書会を設立する（図2）。戦争のニュースが街に氾濫するなか、都市では戦地慰問の欲求もあって絵葉書の人気が高まり、大ブームがはじまりつつあった。

坪谷水哉の『博文館五十年史』によれば、「当時博文館印刷所理事大橋光吉氏は、数年来絵はがきの改良発達に苦心」¹⁵していた。彼の意気込みは、『ハガキ文学』「発刊の辞」によく表れている。

思ふに葉書は日常応酬の具たるに過ぎるも、之を美化し趣味あるものとなさば、直接には受信者の慰藉たり、間接には人性を純粹にするに少補あらずんばあらず、故に本誌は力を此の方面にし、之が鼓吹に当ると共に、特に雅致清高なる図案を選んで刊行し批判者として工作者として斯道に尽さんことを期す¹⁶。

日常のコミュニケーションの道具に過ぎない絵葉書であるが、それを「美化」し「趣味あるもの」にすることで、見る者になぐさめを与え、また「人性を純粹に」するための尽力が約束されている。大橋にとって、絵葉書は単なる時流にのった際物ではなく、力を注ぐに値するものだったといえよう。彼は自分でも絵葉書を集めたようで、自ら絵葉書交換会に参加して「珍中の珍、奇中の奇に非ざれば答礼せず」¹⁷とまで述べていたという。

日本葉書会の経営は、決して大規模なものではなかった。大橋光吉宅に住み込み、小僧として働いていた新藤彊平の回想によれば、作業の中心となったのは大橋光吉の妻幸子であつたらしい。少ない人手ながら、市内各所に絵葉書を卸し、売行きをのばしていった様子がうかがえる。

〔大橋光吉〕社長御夫人が専心それに当つてゐられたその指揮の下に、小僧として私と今一人、即ち二人で、絵ハガキの印刷は他所でやらせ、一人の得意係が駆け廻つて来る、私達二人は各々箱車に絵ハガキを入れて市内の店へ配達して歩く。その頃は未だ電車はなく、本所深川を除いて殆ど市内一^{ツツ}体に亘つて出廻つたことゝて朝から晩迄走り廻つたのです。夜はお宅の八畳の間に六個の机を並べて印刷屋から届いた絵ハガキの組み合わせや袋入れをする、御夫人も私等に混じつて御精の出られること並大抵ではなかつた。それが毎晩十時十一時に及んだし、地方からの注文の受付記帳一切も御夫人がなされてゐられた等、普通人の真似も出来ぬ程のお働きでありました。／絵ハガキは、名所、風俗、風景物等で、菊の節には、その頃菊人形で隆盛を極めてゐた団子坂へ出店を張り、日曜や祭日の売上げは一日百五六十円位ありました¹⁸。

『ハガキ文学』

機関誌『ハガキ文学』の創刊は1904年10月、日本葉書会発足の半年後のことである。この半年の間

に、戦地への慰問を目的とした絵葉書が大当たりし、通信省の日露戦役記念絵葉書が瞬く間に売り切れるなど、絵葉書の流行は顕著なものとなっていた。

そうした趨勢のなかで登場した本誌は、大きさは菊判約60頁、定価6銭から15銭の月刊誌で、「博文館がこれまで刊行してきた雑誌とは全く趣を異にし、表紙は多色石版刷り、口絵は当時ようやく開発された単色の写真版多数葉を収め、本文二色刷りの瀟洒なものであった」¹⁹（図3）。附録に絵葉書を添えたこともあり、創刊号は六版を重ねたという。1910年8月までの約6年にわたって、臨時増刊を含む150冊あまりが発行された。

『ハガキ文学』の広告から宣伝文を抜萃してみよう。

●葉書文学は毎号美麗なる口絵写真版数十葉及び絵葉書を挿入す 表紙は毎号これを諸大家に囑し尤もその粹をこらし体裁は尤も優美にして清洒なり

●葉書文学は毎号文芸諸大家博士学士等盛に筆を執り知名の画家十数名は交々その作を寄せてその内容を飾る 然も高尚に走らず野卑に流れず整々として文芸界の寵児を以て任ず

●葉書文学は紙面の過半を割いて青年文芸の馳駟に委す 普通文可なり小説可なり新体詩可なり和歌可なり俳句可なり其の他あらゆる文芸の作品は歡むでこれを迎ふ（…）

●葉書文学は定価僅に拾銭にして全国中唯一の低廉雑誌なるはその内容体裁を味ひしものの知る所なり²⁰



図3 『ハガキ文学』創刊号表紙

『ハガキ文学』は絵葉書という新しいメディアの趣味向上を主眼としながら、単なる絵葉書のカタログ的介绍にとどまらず、青年向けの投稿欄を多く取った文芸美術雑誌の体裁をそなえたものであった。また、価格が「低廉」であることもアピールされている。

同誌の特徴である投稿欄は「ハガキ文学」と題され、普通文・新体詩・ハガキ文・漢詩・和歌・俳句・川柳・狂歌・一口噺などが募集された。「文章の形を限り浮辞を除き緊密素朴、簡潔にして意義を透徹せしめん」²¹ために「採録するところの文の長さ、僅かに葉書面に記すに足るを要す」²²の形式が選ばれている。読者にむけて、「一口に説明すれば「葉書文学」とは葉書の大きさに書き切れる文学の総ての種類を集めたものだ、「葉書文学」だから、候文の同居だなぞと早合点されては難有迷惑に候呵々」²³と注意がうながされている。

編集者たち

『ハガキ文学』編輯局は、日本葉書会の内部に設けられ、幾人かが在籍して編集の任にあたっていた。在籍者・期間については不明な部分も多いが、1904年12月の第3号より1905年2月の第2巻第2号までの編輯をとりしきったのは、俳人若尾瀾水である。瀾水は当時東京帝国大学法科政治学科の学生であり、子規庵にも出入りしていたことが知られている²⁴。瀾水によれば、「客秋本誌発刊の計画あるや、主幹大橋氏予が頑愚を捨てず、切に編輯の責任を担当せんことを以てせらる」ため、「第三号より以降本号に到るまでは、一切一人にて切盛りをなし」²⁵たという。

その後、1905年の編輯局には鈴木秋風と、後に東京市史編纂係となる木暮理太郎が加わった²⁶。1906年（第3巻）から1908年（第5巻）にかけて、氏名の判明している編集者は次の通りである²⁷。

1904年～1905年2月 若尾瀾水

1906年 西村酔夢 土屋香葉 木暮理太郎 安部烏橋 鹽井雨江 太田三郎 太田南岳 佐藤生巢

1907年 木暮理太郎 橋本春郊 太田三郎 佐藤生巢

1908年 橋本春郊 岩室竹圃 太田三郎 佐藤生巢

西村酔夢は1905年に早大文科を卒業したばかりであった。木暮理太郎については、「先生の履歴書には、明治三十二年九月より同三十六年十月迄東京帝国大学哲学科及史学科在学中となっているが、三十六年後も大学に通って研究を続けられ、傍ら「ハガキ文学」の編輯などに関係して居られた」²⁸という述懐がのこされている。3年間連続して名前の見える太田三郎と佐藤生巢とは、ともに若き画学生であり、太田は白馬会研究所に通い、佐藤は東京美術学校西洋画科に在籍していた²⁹。

こうしてみると、大学を卒業した直後か在学中といった若者たちが携わっていることがわかる。創立者の大橋光吉もいまだ30歳であり、日本葉書会を率い編集に携わった人々の年代は、次に述べる受容者層とそれほどかけ離れていない。

受容者層

日本葉書会の大きな特色の一つは、設立当初、会員を募って活動を行った点にある。会員区分は、「本会の特に推選せる文学美術の大家」からなる名誉会員（賛助員）と、「会員十名以上の支部長又は本会に功劳ありたる」特別会員、「会費六ヶ月以上納付」した通常会員³⁰の三種である。

名誉会員には著名人が名を列ね、その数は実に108名におよんでいる（表1参照）。与謝野鉄幹、坪内逍遙など、文人や学者が多くを占め、和田英作や中村不折ら画家も少なくない。

一方、特別・通常会員は一般の青年たちが主であり、『ハガキ文学』創刊の時点で2000名あまりに達していたという³¹。とくに、「本誌は主として地方にある青年文士を会員とし其言論機関たるを期せり」³²と告げられている通り、全国各地に支部が設けられた。1905年1月の時点で、支部は北海道に5箇所、以下東北7、関東9、中部4、近畿7、中国13、九州9、軍艦明石・日進・浪花と防備隊

表1 日本葉書会名誉会員（アイウエオ順）

氏名	備考
浅井忠	洋画家
跡見花蹊	日本画家
姉崎正治	文学博士，宗教学者
石黒直豊	文学士
石橋思案	小説家，博文館編集部
伊東平蔵	
伊藤祐毅	
井上通泰	歌人，医学博士
巖谷小波	作家，児童文学者
上村左川	翻訳家
鶴澤四丁	俳人
内ヶ崎作三郎	文学士
江見水陰	小説家
押川春浪	小説家
大岡育造	政治家
大下藤次郎	水彩画家
大塚保治	文学博士，美学者
大町桂月	文学士，博文館編集部
大和田建樹	国文学者，詩人
小笠原長生	海軍少佐
岡田朝太郎	法学博士
尾形月耕	日本画家
岡野知十	俳人
岡部精一	文学士
長田秋濤	劇作家，仏文学者
小山内薫	劇作家，演出家
寛克彦	法学博士
梶田半古	日本画家
加藤正治	法学博士
川田豊吉	工学士
川端玉章	日本画家
岸上質軒	著述家，博文館編集部
北澤楽天	画家
木村小舟	博文館編集，児童文学者
肝付兼行	海軍少将
窪田重弑	海軍機関中監
久保田米奈	画家
久保天随	文学士，漢文学者
黒田清輝	洋画家
下條正雄（桂谷）	日本画家，貴族院議員
合田清	木口木版家
二世五姓田芳柳	洋画家
児玉秀雄	法学士，官僚（児玉源太郎長男）
齋藤信策（野の人）	評論家，高山樗牛の実弟
笹川臨風	文学士
佐々木信綱	歌人，国文学者
佐々醒雪	文学士，俳人
寒川風骨	俳人
志賀重昂	農学士，地理学者
志田鉦太郎	法学博士，商法学者
下村為山	俳画家
新海竹太郎	彫刻家
杉本貞次郎	

高木貞治	数学者
高田早苗	文学博士，教育家，政治家
高安月郊	詩人，劇作家
武内桂舟	日本画家
武田櫻桃	俳人，博文館編集
玉置金司	洋画家
田山花袋	小説家，博文館編集
塚越芳太郎（停春）	文学者，歴史家
塚本靖	工学博士，建築学者
角田竹冷	政治家，俳人
坪井正五郎	理学博士，人類学者，考古学者
坪内雄蔵（逍遙）	文学博士，小説家，劇作家
坪谷水哉	博文館編集，児童文学者
寺崎廣業	日本画家
登張信一郎（竹風）	文学士，独文学者，評論家
富岡永洗	日本画家
鳥谷部春汀	博文館編集
内藤鳴雪	俳人
長井金風	儒者，詩人
中内蝶二	文学士，小説家，博文館記者
中川霞城	俳人
中澤弘光	洋画家
中島孤島	小説家，評論家
中村春雨	小説家，劇作家
中村進午	法学博士
中村不折	洋画家
野口小頻	日本画家
野村宗十郎	印刷業者（東京築地活版製造所）
芳賀矢一	文学博士，国文学者
橋本青雨	文学士，翻訳家
長谷川天溪	評論家，博文館編集
濱田四郎	博文館編集
平木白星	詩人
深田康算	文学士，美学者
藤代禎助	文学士，独文学者
藤田順吉	俳人
堀野文禄	戯作者，出版・絵葉書業者（文禄堂）
松井柏軒	新聞記者
松原廿三階堂	小説家，博文館編集
水落露石	俳人
水野年方	日本画家
箕作元八	西洋史学者
美濃部達吉	法学博士
三宅克己	洋画家
宮本叔	医学博士，細菌学者
安田善三郎	実業家，貴族院議員
山崎直方	理学博士，地理学者
山中古洞	日本画家
山利由人	
湯川元臣	法学士
与謝野鉄幹	歌人，詩人
若尾欄水	俳人，ハガキ文学編集
和田英作	洋画家
和田垣謙三	法学博士，経済学者
渡邊審也	洋画家

参照：『ハガキ文学』1(1)，同2(1)

1の計57箇所³³に設けられていた。軍艦にも支部が設立されているのは、戦時下故とはいえ興味深い。実際、投稿者の姓名に付された住所を調べてみると、札幌や鹿児島など様々な地方からの投稿が確認される。また、女子も入会できるかとの問い合わせには、「差^{つかえ}間ありません、既に多数の女子の会員があります」³⁴と記者の回答が寄せられている。

会員の中心となったのは、旧制中学の学生であったようだ。たとえば、1892（明治25）年岩手水沢生まれの森口多里は、「日露戦争直後の私は田舎の中等初年生で、漸く『はがき文学』などで文学や美術の片鱗に触れ初めた」³⁵と回想している。おそらく、『ハガキ文学』を購読した年若い読者の多くも、児童向けの読み物を卒業して、「文学や美術の片鱗」にはじめて触れるような体験をしたのではないと思われる。

彼ら会員たちは、会則で「投書は大抵添削掲載す可し」³⁶と約されている。『ハガキ文学』投稿者について調査した井荻草房主人は、常連の中に大衆小説家加藤武雄、詩人生田春月、英文学者谷崎精二らの姿を認め、次のように述べる。「此の「ハガキ文学」は、文芸美術一般を内容としたいはゞ趣味雑誌ではあるが、そして当時の斯界の大家名士の執筆を誇りとはしたが、更に一方大いに新進の文学青少年、或は隠れた無名素人文士の為に紙面を割愛提供した、投稿文学雑誌としての尠なからぬ特色を有つてゐることを認めねばならない」³⁷。実際、1905年10月の一周年記念号は、一冊まるごと読者の投稿で構成されていた。

こうした青年学生を主な対象としつつも、絵葉書自体はより広い受け手を想定していたようだ。「絵葉書店頭五分間」と題された日本葉書会の広告読み物では、「三十前後の洋服の紳士」にはハイカラなもの、「海老茶袴の十八九の令嬢」には清方の《恋十種》、十五六の中学生には「新刊のやつて画を稽古するのに良い様な絵葉書」として水彩絵葉書、「五十許りの赤毛布の老夫」には孫への土産として戦争ものや東京風景、また滑稽絵葉書、「二十八九の奥様」にもお土産として「新らしいのと、気の利いて居ると、おしだしのよいのと、そしてお値段のお格好なの」が勧められている³⁸。

美術印刷工場・精美堂

増大する絵葉書と雑誌印刷の需要は、従来の博文館印刷工場の設備では応えきることができなかった。折悪しく1904年末に工場が火災に見舞われ、一部を残して焼亡してしまう。この火災を契機に、博文館の印刷部門は設備の拡充をはかり、活版部門と写真製版部門を切り離して、自社内で広範な印刷が可能な体制を築いた。そうした趨勢のもと、1906年4月、日本葉書会は印刷工場精美堂を併設する。博文館系列の印刷工場が専門としない石版印刷を中心とした美術印刷を扱うためであった。資本金は3万円、ヒューゴーコッホという印刷機二台からの出発である。

『大橋光吉翁伝』に引かれた精美堂の引札には、博文館の雑誌『文藝倶楽部』主筆であった石橋思案の手によって次のような文句が記されている。

堂主大橋光吉氏このたび、戦後経営の第一着手として多年蘊蓄せる技量を本務の印刷術に傾注し、

彫刻製版両つながら深厚の注意を払い、可惜曠世の美術品を其の複製の事に汚濁する憾^{うら}みを除かんとす、其の製品の廉なるはいわずもあれ、^か慙^かくて聖代の圭運に聊か貢献するところあらんとて、玆に最善最良の印刷所精美堂を創設す³⁹

1900年代の出版印刷界では、美術印刷・大量印刷に対する需要が急増していた。大橋は、日露戦争終結後の「戦後経営」をにらみ、美術印刷の世界へ打って出たと言えよう。

精美堂は当初から活版、石版、写真版、コロタイプ、木版彩色版、凸版などの多様な版式を営業課目とし、とりわけ多色刷りに意欲を持っていた。創業を告げる宣伝文では、「精美堂ハ彩色印刷に付多年の経験に鑑み 原画の筆力を保ち色彩の調和を謀り舶来印刷に劣らざるを期す／精美堂ハ印刷鮮明にして価格頗る低廉なり」⁴⁰と公言されている。

絵葉書の流行が美術印刷の需要を高め、多色刷印刷技術の発達を招いた点は、川田久長によってすでに指摘されているところである⁴¹。精美堂の成長はこうした傾向に乗じたものであり、最も成功した例の一つと言ってよいだろう。精美堂は徐々に大橋光吉の事業の主体となり、のちの共同印刷株式会社における平版印刷部の基礎となったのである。

2. 美術絵葉書

絵葉書ブーム

絵葉書はそもそも、1870年の普仏戦争に際して誕生したと言われる、新しい通信手段であった。1900年前後には、ビジュアル・コミュニケーションのメディアとして、コレクションの対象として、国際的な流行を見せるようになる。これは、国際郵便制度⁴²や交通網などのインフラストラクチャーの整備と同時に、戦争や交易、植民地経営、ツーリズムの興隆によって人の移動が増え、また写真・印刷技術がめざましく発達した、20世紀への世紀転換期における社会状況と不可分である。

日本においては、1900年の郵便法の制定による「私製葉書」認可によって、絵葉書のやりとりが広がりはじめた。まず海外渡航者を中心としたインテリ層からもてはやされはじめるが、日露戦争とその凱旋の時期である1904-6年、とりわけ1905年頃に最高潮を迎える。石井研堂『明治事物起原』によれば、「絵葉書の最も盛んに行はれたるは三十七八年征露の役、在外将卒慰問に之を使用したるに起り、好事者の間に絵葉書熱沸騰したりし」⁴³という。

このブームの原動力の一つとなったのが、通信省の発行した戦役記念絵葉書であった。その発売に際しては、郵便局に群衆が大学して押寄せ、長蛇の列をつくった。発売日には「此程来の混雑状況を鑑み警戒最も嚴重に売出したるも人気の立ち居る時と云ひ今回の記念絵葉書を高価に買入るゝものありとの評判さへあれば一層の混雑を極め卒倒するもの負傷するもの多かりし」⁴⁴と報じられている。山本笑月は「各郵便局前は長蛇の列を作つたが、終に神田万世橋郵便局では人死にがあつたといふ騒ぎ」⁴⁵と述べているが、これはおそらく話に尾ひれがついたものだろう。

こうした熱狂的流行は、東京から地方都市へとまたたく間に伝わっていったようだ。絵葉書のブー

ムは社会現象となり、多くの人々が絵葉書を集め、また絵葉書を発行する版元・出版社も急速に増加した。先に述べたとおり、日本葉書会の誕生はまさにこのブームの高まりに先駆けるものであった。

絵葉書趣味の鼓吹—オピニオン・リーダーとしての名誉会員

日本葉書会は、『ハガキ文学』の発行を通して、ブームを牽引する役目もはたした。先に触れた日本葉書会名誉会員たちのなかには、蒐集家として名を馳せる人物が少なくない。1905年5月の『ハガキ文学』第2巻第6号には、会員による「絵葉書蒐集家投票」の結果が20位まで掲載されている。第一位は巖谷小波、二位は箕作元八、以下岡田朝太郎、塚本靖、加藤正治、窪田重式、寛克彦、中村進午、久保田米斎、宮本叔…と続く。票を集めた20人は、すべて名誉会員に名を連ねている。

第一位の巖谷小波は、博文館『少年世界』主筆として「お伽噺」を創作・紹介した近代日本児童文学の父である。この頃の小波は、絵葉書の一大蒐集家かつ、有力なオピニオン・リーダーの一人であった⁴⁶。『ハガキ文学』創刊号の劈頭は、「画葉書！ 好い物がはやり出して、まことに嬉しい事であるが、その流行は益々進んで、高尚優美なる画葉書を発行せしむるに至つたのは、更に喜ぶ可き事である」⁴⁷という小波の祝辞からはじまっている。

小波の蒐集は、1890年代におけるドイツからの来信をきっかけとし、1900年からの2年間にわたるベルリン滞在が拍車をかけた⁴⁸。この時代のドイツは国際的絵葉書ブームの震源地であり、多くの日本人留学生たちが絵葉書熱を発症している。蒐集家第二位の西洋史学者箕作元八は、1899年12月30日の日記に「近來ドイツにては絵葉書を集むること非常に流行せり。日本人中にもこれを集める人少なからず。(…)小生も少々伝染気味にて、散歩の時などに面白き画葉書を買うことあり」⁴⁹と記している。「伝染気味」であった箕作は、たちまちのめりこんでいったようである。

自分は性来楽しみの少ない為め、洋行中勉強時間外には、いつも無聊に苦んで居た。(略)何か一とつ気を慰めること無からうかと種々考えた末、遂に此の絵葉書を蒐集する気になった。漸々集まるに従つて友人と競争して益々珍奇なるものゝ蒐集に勉めた。(…)其当時の熱の高さといつたら実に非常なもので、毎日毎日運動がてら必らず絵葉書探検に歩いたものだ。一日でも怠ろうものならば其夜は心地が悪くて寝つかれない位であつた⁵⁰。

名誉会員には、1900年前後の滞欧経験を持つものが多い。おそらく、当地を席卷していた絵葉書ブームを体験したものと考えられる。彼らは『ハガキ文学』へ絵葉書・文芸・美術論を寄稿し、画家の場合はまた表紙や絵葉書に腕をふるった。絵葉書ブームのオピニオン・リーダーとも言える知識人たちが名誉会員としてとりこみ、誌面に反映させたことは、日本葉書会の理念を明確にし、人気をささえたものと考えられる。

表2 日本葉書会発行絵葉書（作者名アイウエオ順）

絵葉書名	作者等	版式等	組数	代価
今様大津絵	浅井忠	石版彩色	6枚	15銭
御題絵葉書 雪中松	跡見花蹊	コロタイプ		6銭
新年河	跡見花蹊	コロタイプ	5枚	10銭
蝶とすみれ	跡見花蹊	石版	1枚	5銭
四季の花（上下）	跡見花蹊	石版	各6枚	各30銭
水彩 潮風	跡見泰	石版	6枚	20銭
—	池田蕉園	石版		
美人風俗	市川秀方	木版	6枚	50銭
学生ポンチ	伊藤素軒	石版	6枚	18銭
やまとなでしこ	上村松園	石版台紙附	6枚	30銭
時代美人	歌川國峰	木版	6枚	85銭
山紫水明	大下藤次郎		6枚	25銭
水彩絵葉書（上下）	大下藤次郎	石版精巧13度刷，ケント付	各6枚	各25銭
水彩画	大下藤次郎		各2輯6枚	18銭
愛の面影	太田三郎	石版	6枚	18銭もしくは25銭
乙女心	太田三郎	石版	6枚	25銭
カレンダー女十姿	太田三郎		12枚	30銭
東京名所（自第一輯至第六輯）	太田三郎	コロタイプ	各5枚	各10銭
ハッピークリスマス	太田三郎	石版彩色	2枚	25銭
秘密ハガキ	太田三郎	石版	1枚	5銭
花鳥十二ヶ月	太田南岳	石版	6枚	20銭
戦捷記念葉書	太田南岳案	石版及コロタイプ	6枚	15銭
名所十二ヶ月（上下）	尾形月耕	石版彩色	各6枚	各13銭
風俗十二ヶ月	尾形月耕	石版	12枚	40銭
京の子	岡田三郎助	石版	1枚	特製50銭，並製35銭
演芸咲分	岡野榮	石版	6枚	18銭
活人画葉書 青春（春夏秋冬）	小栗風葉，斎藤松洲合作	コロタイプ	各4枚	各16銭
花の水彩	織田一磨	石版	6枚	18銭
子供ポンチ	織田東禹	石版	6枚	15銭
日本観光	海東久	石版	6枚	20銭
改良服絵葉書	梶田半古	石版	6枚	15銭
婦人と小兒	梶田半古	石版極彩色	6枚	15銭，箱入20銭
祝賀箋	梶田半古	石版彩色	1枚	5銭
滑稽葉書	梶田半古	石版彩色	6枚	30銭
動物絵葉書	梶田半古	彩色	6枚	15銭
恋十種	鏑木清方	石版彩色	10枚	50銭（のち35銭）
昔噺	猩々曉齋	木版	3枚	30銭
滑稽漫画ハイカラ	北沢楽天	極彩色	6枚	25銭
滑稽漫画文明の普及	北沢楽天	極彩色	6枚	25銭
漫画はがき	北沢楽天	石版	6枚	25銭
詩箋葉書	下條正雄（桂谷）	石版	6枚書簡箋 附箱入	15銭
今昔六種	小杉未醒	石版	6枚	18銭
戦捷記念	五姓田芳柳	石版極彩色	6枚	18銭
六芸絵葉書	小堀鞆音	石版	6枚	20銭
俳諧葉書（秋）	斎藤松洲	石版	6枚	30銭
俳諧葉書（冬）	斎藤松洲	石版	6枚	30銭
俳諧葉書（夏）	斎藤松洲	石版	7枚	30銭
俳諧葉書（春）	斎藤松洲	石版	7枚	20銭
カードハガキ	佐藤生巢	石版	6枚	25銭
博覧会記念葉會	佐藤生巢	石版彩色	3枚	10銭
女神	佐藤生巢	石版	6枚	25銭
ひつじ新春	佐藤生巢案，泰西名画	コロタイプ	2枚	10銭

絵葉書名	作者等	版式等	組数	代価
鎌倉名所葉書	佐藤生巢装画	コロタイプ	6枚	15銭
逗子名所葉書	佐藤生巢装画	コロタイプ	6枚	15銭
葉山名所葉書	佐藤生巢装画	コロタイプ	6枚	15銭
愛	島崎柳塙	石版彩色	3枚	25銭
四季の眺め	鈴木華村	木版	6枚	45銭
恋日記	竹久夢二	石版	6枚	18銭
やまと風俗	寺崎廣業	木版	6枚	1円
花と美人	寺崎廣業	石版	6枚	15銭
佳人の装	富岡永洗	木版	6枚	1円
歴史はがき	富岡永洗	石版極彩色	6枚	25銭
子供はがき	富田秋香	石版	6枚	15銭
透画葉書涼風	中澤弘光	石版	6枚	15銭
花の精（上下）	中澤弘光	石版	各6枚	各18銭
花暦	中澤弘光	石版彩色浮出し	12枚函入	35銭
写生画葉書	中澤弘光		アルバム入	30銭
水彩写生 夜の中禅寺	中澤弘光	石版石目附彩色	6枚1組	18銭
名所十二ヶ月	中澤弘光		（上下）各6枚	各13銭
日露戦争絵葉書 旅順陥落記念	中村不折	石版金銀極彩色	6枚	15銭
世界のパノラマ	中村不折	石版	6枚	20銭
精美	野田道三（九浦）	石版	6枚	25銭
[タイトル不明]	橋口五葉	石版		
鉛筆スケッチ絵葉書（上下）	橋本邦助	石版	各6枚	各12銭
金色銀彩	橋本邦助	石版	6枚	25銭
歴史はがき	橋本邦助	石版	6枚	25銭
花と虫	藤島武二	石版	6枚	18銭
北斎漫筆（第1輯-第3輯）	北斎、斎藤松洲撰	木版	各6枚1組	各25銭
花？人？	本多穆堂	石版	6枚	35銭
[タイトル不明]	前川千帆	石版		
歌箋	松岡輝夫（映丘）	石版	6枚	15銭
芸術	松岡輝夫（映丘）	石版	3枚	10銭
水彩 山光水色	丸山晚霞	石版	6枚	18銭
水彩葉書 山と水	丸山晚霞	石版極彩色	6枚	20銭
水彩六景	丸山晚霞	石版	6枚	18銭
花	丸山晚霞	石版	6枚	25銭
カレンダー	水野年方	木版15度刷	4枚続	50銭
日本美人	水野年方	石版	6枚箱入	25銭
古今美人（上下）	水野年方	木版	各6枚	各1円
子供ハガキ有心無心	宮川春汀		4枚	12銭
花くらべ	宮川春汀		6枚	15銭
水彩スケッチ山水美（上下）	三宅克己	石版	各6枚	各15銭
水彩月夜の美観	三宅克己	石版	6枚	20銭
水彩手本風景葉書	三宅克己	石版	4枚	各20銭
水彩風景（上下）	三宅克己		各4枚	各20銭
水彩明媚十二景	三宅克己		各6枚	各20銭
水彩絵葉書（上下）	三宅克己	石版、ケント付	各6枚	各25銭
水彩画十二月（上下）	三宅克己	石版極彩色石目附	各6枚	各25銭
水彩十景（上下）	三宅克己	石版彩色精巧極版	各5枚	各20銭
日露戦争絵葉書一 海戦之部（第一輯）	木曜会図案	石版極彩色	6枚	特製25銭・並製15銭
日露戦争絵葉書二 陸戦之部（第一輯）	木曜会図案	石版極彩色	6枚	特製25銭・並製15銭
銀燭	山田清	石版	6枚	18銭
日露戦争絵葉書三 旅順之海戦	山中古洞	写真彩色	12枚	12銭

絵葉書名	作者等	版式等	組数	代価
花紅葉	山中古洞	石版		
月桂冠	山村耕花他当選者六人		6枚	20銭
日露戦争絵葉書六 陸戦之部（第二輯）	和田英作	石版極彩色	7枚	15銭
慰問絵葉書	和田英作、石橋思案	石版、便箋状袋附	6枚	15銭
ペン画葉書	和田三造	石版	6枚	18銭
和楽	和田三造	石版	6枚	20銭
日露戦争絵葉書五 海戦之部（第二輯）	渡邊審也	石版極彩色	6枚	15銭
巳の歳絵葉書（日本画の部）	江の島・川端玉章、弁財天・寺崎廣業、懸想文・水野年方、還城楽・梶田半古、新年山・跡見花蹊、竹生島・尾形月耕、二見か浦・武内桂舟	石版極彩色	7枚	15銭
午の初春（洋画大家の部）	岡田三郎助、藤島武二、和田英作、満谷国四郎、大下藤次郎、三宅克己	石版	6枚	20銭
朝日影	神路山・斎藤松洲、豊年・橋本邦助、御慶・一條成美	石版極彩色16度刷	3枚	12銭
清驕	金蓮花・和田英作、夕陽・岡田三郎助、夕月・鹿子木孟郎、虫狩り・満谷国四郎、海の精・藤島武二、清驕・太田三郎	精巧三色版刷	6枚	30銭
秀逸	懸賞当選「全国青年画家合作」	石版極彩色	6枚	18銭
水彩朝瞰	三氏傑作		3枚	10銭
各画傑作集（上下）	十二大家合作	コロタイプ	各6枚	各18銭
巳の歳絵葉書（洋画の部）	正月遊・和田英作、江の島・三宅克己、遣羽子・久保田米斎、不忍池・五姓田芳柳、玉川の春・大下藤次郎、祈願・中澤弘光、付録：七曜表	石版極彩色	7枚	15銭
女子大学バザー四枚続	女子大学	石版彩色	1枚	15銭
女子大学バザー葉書乙	女子大学	石版彩色	3枚	15銭
女子大学バザー葉書甲	女子大学	石版彩色	3枚	20銭
林檎カード	女子大学		1枚	15銭
日露海戦一週年紀念	関重忠、窪田重弼、若林欽合作	石版コロタイプ浮出	6枚	20銭
午の初春（日本画大家の部）	寺崎廣業、梶田半古、水野年方、久保田米遷、斎藤松洲、跡見花蹊	石版	6枚	20銭
実用はかき	二名氏案	石版	20枚	12銭
花鳥絵葉書	野口小菫、跡見花蹊		6枚	15銭
日本名画傑作集（上下）	橋本雅邦他12大画家	コロタイプ	各6枚	各18銭
栄光	橋本邦助、中澤弘光、和田[三造?]		3枚	10銭
午の初春（青年洋画大家の部）	橋本邦助、橋口清（五葉）、和田三造、小林章吉、本多穆堂、太田三郎	石版	6枚	20銭
御題葉書 新年の松	初日・野口少菫、日の出・跡見花蹊		2枚	5銭
丁未新彩	牧羊・梶田半古、春の小女・水野年方、初夢・榊原蕉園		3枚	10銭
水彩新曙光	丸山晚霞、大下藤次郎、三宅克己	石版	3枚	10銭
家庭絵葉書（上下）	水野年方	コロタイプ	各6枚	各18銭
寛政美人	水野年方閨、荒井寛方画	木版	6枚	65銭

絵葉書名	作者等	版式等	組数	代価
集古拾種	傑作十人	木版	各5枚	各25銭
黄菊白菊	年方、半古、松洲、玉堂、 花溪、柳塢	コロタイプ	7枚	22銭
糸すゝき	江木写	コロタイプ	5枚	20銭
女郎花	江木写	コロタイプ	5枚	20銭
東京名所（上下）	小川一真写	コロタイプ	各6枚	各18銭
海（第三・静浦）	菊池写	コロタイプ	6枚	15銭
名所葉書 興津	菊池写	コロタイプ	6枚	15銭
鳳雛	懸賞当選	石版	6枚	20銭
春光	懸賞当選	石版	6枚	20銭
新彩	懸賞当選	石版	6枚	18銭
風雛	懸賞当選	石版	6枚	20銭
あづま美人（第一輯第二輯）	柴田常吉写	コロタイプ	各3枚	各10銭
海（第一・大磯、第二・江の島）	柴田常吉写	コロタイプ	各6枚	各15銭
海老茶式部（第一第二）	柴田常吉写	コロタイプ	各5枚	各15銭
元禄踊	柴田常吉写	コロタイプ	2枚	5銭
名所葉書 日光（上下）	柴田常吉写	コロタイプ	各10枚	各20銭
名所葉書 箱根（上下）	柴田常吉写	コロタイプ	各6枚	各15銭
靖国神社大祭記念ハガキ	柴田常吉写		6枚	10銭
秋草と美音	柴田常吉写	コロタイプ	6枚	15銭
泰西名画葉書（上下）	袖珍解説書（鈴木秋風著）付	コロタイプ	15枚	50銭
エハガキ女学校	東都六大女学校	コロタイプ	6枚	12銭
史蹟葉書楠公（第一第二）	日本葉書会撮影	コロタイプ	各5枚	各10銭
高山植物はがき	前田曙山氏解説付	コロタイプ	6枚	各15銭
蝶はがき	名和昆虫研究所長発明専売特許	細工物、一枚蝶一種	1枚	25銭
赤紙黄紙ハガキ			1枚	3銭
意外（上下）		石版	上1枚、下2枚	各10銭
今様美人はがき		コロタイプ彩色刷り	6枚1組	12銭
木屑絵ハガキ		細工物	4枚	18銭
絹地絵葉書		細工物	1枚	15銭
元禄風姿薄化粧		ブロマイド	6枚	90銭
甲信名勝		コロタイプ	6枚	15銭
戦役記念葉書		秋冬石版彩色コロタイプ	6枚	15銭、箱入20銭
戦地写真葉書		写真版六色刷	12枚	15銭、箱入20銭
日本名所（上中下）		コロタイプ	各5枚	各10銭
ハイカラ			6枚	25銭
富士三景（第一〜三輯）		コロタイプ	3枚	6銭
富士はがき		コロタイプ	6枚	12銭
文芸倶楽部当選美人 二萬龍				
文芸倶楽部当選美人甲乙石				
版意匠浮出		コロタイプ	各3枚	各15銭
都の花（上下）		コロタイプ	各5枚	15銭
愛			6枚	25銭
解語の花		コロタイプ 極彩色	6枚	18銭
元禄姿		コロタイプ 極彩色	5枚	15銭
新粧美人（上下）		コロタイプ	各6枚	各15銭
泰西名画葉書（上下）		コロタイプ	各8枚	各18銭
大津絵			6枚	15銭
東京四大公園		ブロマイト	2枚	30銭
東京名所（上下）		コロタイプ彩色刷	各6枚	12銭
日本美人			6枚	25銭
日露戦争絵葉書四 在韓之 我陸軍		写真彩色	12枚	12銭
富士と元禄美人		ブロマイト 頗精巧	1組2枚	30銭
封緘 満艦飾（上下）		木版	各1枚	各15銭

絵葉書と画家

名誉会員に名を連ねた画家の多くは、日本葉書会の絵葉書を手がけている（表2参照）。現在までの調査によれば、日本葉書会から発行された絵葉書のうち、画家の手によると考えられるものは約140件あまり、全体のおよそ7割以上におよんでいる。参加した画家はおよそ60名ほどで、選択の経緯については明らかではないが、洋画、日本画、浮世絵などその系統は多岐にわたっている。洋画で



図4 岡田三郎助作絵葉書，日本葉書会（林宏樹氏所蔵）

は岡田三郎助（図4），中澤弘光など白馬会系の画家が多いのが特徴であるが，浅井忠や大下藤次郎，二世五姓田芳柳など，それ以外の画家の姿も見える。また日本画・浮世絵系は偏りが少なく，所属する画会や学んだ流派も一様ではない。先に引用した小竹忠三郎は，「和画洋画を問はず，^{いやし}苟くも丹青界に多少名声を揚げたる人で，絵葉書に筆を執らざるは無い」と断じているが，そうした印象も首肯できよう。

この多彩さは，当時多くの画家が書物の装幀や挿絵などの下絵を手がけていたことに起因するだろう。写真印刷技術がいまだ精細な大量印刷には向かなかったこの時代にあって，視覚的情報の担い手



図5 錦木清方《恋十種》より《佐用媛》日本葉書会（林宏樹氏所蔵）



図6 中澤弘光作絵葉書，日本葉書会（『フィリップ・パロスコレクション 絵はがき芸術の愉しみ展』図録）



図7 上村松園《徳川時代》（《やまとなでしこ》のうちの一葉か）日本葉書会（林宏樹氏所蔵）



図8 橋本邦助《鉛筆スケッチ絵葉書》日本葉書会

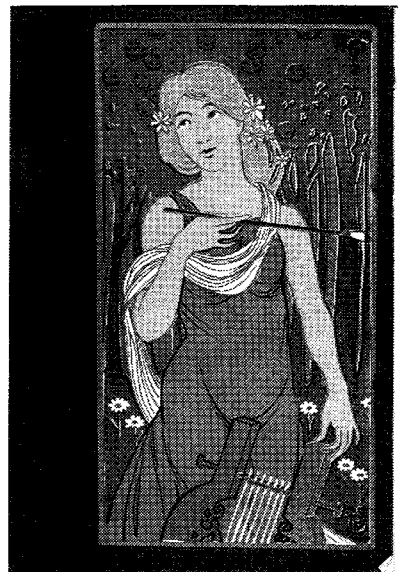


図9 太田三郎
『ハガキ文学』2（18）表紙

としての画家の存在意義はきわめて大きかった。寺崎廣業、尾形月耕、富岡永洗、梶田半古、山中古洞、武内桂舟、水野年方、鍋木清方（図5）など、新聞雑誌に手腕を発揮した画家たちの名は枚挙に暇がない。

なかでも、博文館の刊行物に参加したと思われる画家の姿が確認できる。挿絵『太陽』『文藝倶楽部』から『中学世界』『女学世界』など多数とりそろえ、雑誌王国を築きつつあった博文館もまた、多くの画家たちを挿絵に起用していた。たとえば「博文館の『中学世界』『文章世界』『ハガキ文学』等にもよく描いた」⁵¹という中澤弘光（図6）、『女学世界』で活躍した上村松園（図7）、『中学世界』の批評を担当した橋本邦助（図8）らがあげられよう。

とくに年若い画家にとっては、絵葉書は自分を売り出すための格好の舞台ともなっていた。画家・漫画家の岡本一平は、「絵ハガキ図案に己れを試みる事が当時新進気鋭の画学生等にとつて、それは高名の捷径であり、又才気を奔出させる手頃な舞台でもあつた」⁵²と述べている。なかでも、『ハガキ文学』編集部に在籍した太田三郎と佐藤生巢なども、絵葉書を活躍の場とした代表的な画家である。

1905年2月に「かるた会」という作品で三等に入選し、はじめて誌面に登場した⁵³太田三郎は、黒田清輝の指導する白馬会研究所に所属する画学生であった。1906年1月には編輯局の一員に名を連ね、絵葉書の図案から『ハガキ文学』の表紙（図9）、挿絵等、日本葉書会の刊行物において縦横無尽に腕を揮った。1907（明治40）年から1910（明治43）年の終刊にいたるまで、読者から応募された絵の品評も担当しており、名実ともに『ハガキ文学』を代表する画家であったと言えよう。『明治大正文学美術人名辞書』が、太田について「雑誌『葉がき文学』の編輯により、挿絵画家として名を知られ」⁵⁴たと記しているとおおり、太田の知名度の上昇と日本葉書会の活躍の広がりは比例していた。

佐藤生巢については、現在でもあまり多くのことが分かっていない⁵⁵。『ハガキ文学』創刊号の表紙を手がけており、日本葉書会を舞台として活躍した様子が見ええる。読者からの「本誌表紙画の

筆者は何方です是非教へて下さい」との投書に、記者は「美術学校の佐藤生巢君と申す青年図案家で
す」⁵⁶と答えている。その頃は東京美術学校西洋画科に在籍中であった。1906年年始の時点では編輯
局に在籍しているため、おそらく美術学校へ通いながら日本葉書会とかかわり、次第に世に出てい
たのだろう。生巢のデザインは、アール・ヌーボーを積極的に取り入れたものであった（図10）。

懸賞と青年画家たち

日本葉書会は、広く絵葉書図案の投稿を募り、また折々に懸賞をもうけて、読者参加の門戸を開き
投稿作家を育てていった。投稿青年のうちには、のちに画家の道を選ばんとする学生たちも少なく
なかったようだ。以下の記事からも、投稿者たちのなかに東京美術学校への進学を志した者がいたこ
とがわかる。

憚らずいふが自分は本年東京美術学校の入学試験を受けて見ん事失敗した者である。（…）本年
の受験者（西洋画科）の中に、在田稠，三井不二人，加藤良雄，犬丸嶺夫，鈴木梅月，山田実諸
君のあつた事を読者諸賢にお知らせする。是等諸君はハガキ文学，中学世界，文章世界等で□ス
ケッチ当選せらる秀才である（…）⁵⁷

多くの投稿者のうちで、今日最も知られているのは竹久夢二であろう。夢二は、1905年10月発行の
『ハガキ文学』第2巻第15号で一等に入選している（図11）。夢二は当時、早稲田実業をやめ、挿絵や
コマ絵が様々な雑誌に掲載されはじめていた。荒畑寒村によれば、自筆の絵葉書を早稲田や目白の絵
葉書店に売り、生計をたてていたという⁵⁸。明治末から大正時代に夢二は人気作家となるが、この頃
はまだ数多い投稿者のうちの1人から、頭角をあらわそうとしていた。



図10 佐藤生巢《女神》？，
日本葉書会『フィリッ
プ・パロスコレクション
絵はがき芸術の愉
しみ展』図録)

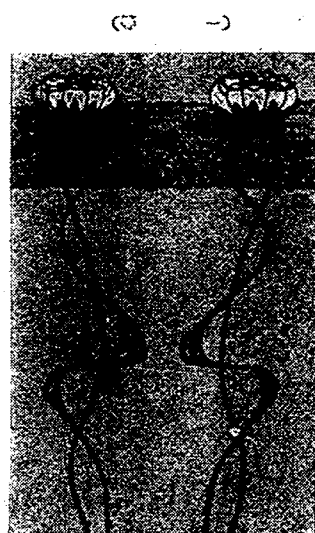


図11 竹久夢二当選絵葉書
（『ハガキ文学』2(15)，
1905年10月）

小石川區大塚仲町 竹久夢二

若い画家志望者たちにとって、大規模な懸賞は魅力的であっただろう。この頃、懸賞自体は珍しいものではなく、学校や研究会の小規模なものから、多額の賞金をかけて大々的に宣伝するものまで、多種多様な募集がなされていた。1905年に日本葉書会が行ったのは、総額百円の絵葉書図案の懸賞であった⁵⁹。1等50円、2等20円、3等10円…という金額は絵葉書の懸賞としては破格である。審査員の顔ぶれは、三宅克己、和田英作、塚本靖、巖谷小波、久保田米斎、新海竹太郎、寺崎廣業、水野年方、川端玉章、黒田清輝、武内桂舟、梶田半古、尾形月耕、玉置金司、大下藤次郎、富岡永洗などの名誉会員であった。

この一等を獲得したのは、東京美術学校日本画科4年の山村耕花であった⁶⁰。懸賞の優秀作品は、『月桂冠』と題された絵葉書として発売されることとなったが、そのお披露目は次に述べる絵葉書展覧会でも行われた。

絵葉書展覧会

日本葉書会の活動は、1905年9月に上野五号館で開催された絵葉書展覧会（図12）に結実する⁶¹。この展覧会は9月6日からの予定だったが、日比谷焼き討ち事件の影響によって、開会は2日遅れの9月8日となった。総裁は柳原義光伯爵、会長は法学士岡田朝太郎、6人の委員には塚本靖、和田英作、巖谷小波、梶田半古、久保田米斎、斎藤松洲が名を列ねたが、そのうち小波以外はみな画家である。

会場設計・装飾は和田英作が中心となって行った。数十室にわたって、内外の多種多様な絵葉書や印刷機械などが展示され、出品は数千点にのぼっている。絵葉書交換所や「絵葉書リボン引き」「釣り落書」などの娯楽を備え、絵葉書売店を設けるなど、まるで絵葉書の祭典のような光景があらわれている。

閉会の9月20日までの13日間で、来場者数は1万人以上に及んだ。最も多い日には2000人を超えたという。訪れた客層は男女を問わず、また子供から軍人、馬車や人力車で来るものまでと幅広いが、多数をしめたのは男女学生であった。

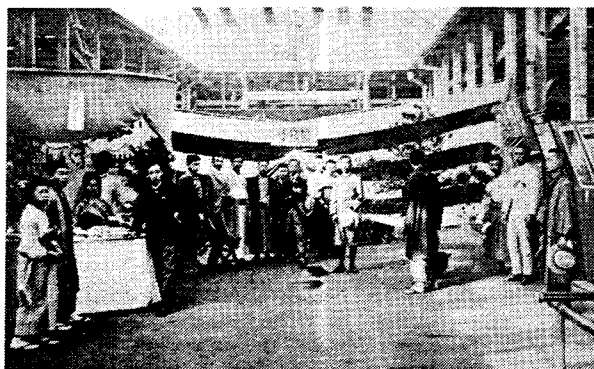


図12 絵葉書展覧会（『大橋光吉翁伝』）

このような絵葉書展覧会は、決して日本葉書会だけが催したのではない。光村利藻の関西写真製版会社による展覧会⁶²や、大阪毎日新聞社、報知新聞社によるもの、L・S会⁶³の恤兵展など、東京・大阪を中心に行われていた⁶⁴。日本葉書会の展覧会は、審査や娯楽の要素を積極的に取り入れて規模を大きくしたものと考えられる。この好評を受けて、同年末にはもう一度、小規模の展覧会が開かれている。

絵葉書展覧会の活況は、絵葉書というメディアに、いかに多くの作り手——画家、発行者、注文者たち、また受け手——絵葉書愛好家たち、さらにその両方にまたがる画家志望の学生たちが集ったか、またいかに購買の対象として魅力があったかをよく示しているだろう。

日本葉書会絵葉書の特色

それでは、日本葉書会の販売した絵葉書はどのような特徴を有していたのだろうか。1905年春の『文藝倶楽部』において、日本葉書会は自分たちの絵葉書について以下のように説明している。

本会で発行する絵葉書は、絵画に関する智識^{あきね}を治く普及させんが為め、斯道の大家として名声隠れなき日本画家若くは洋画家に揮毫を託し、尚日露戦争紀念として海陸戦の実況を描ける石版彩色刷葉書並に在韓の我陸軍の写真銅版彩色刷の葉書を発行して好箇の紀念物たらしめ、東京名所、今様美人等の絵葉書は特にコロタイプ版とし、坐^ゐながら其物に接する思ひあらしむるなど、正に絵葉書の真価を現し得る逸品である。(…) 価格も余り高きに過ると使用者は無益の金銭を費すが如き感を生じ、贅物の娯楽として一部の好事家を喜ばすに過ない。で本会発行の絵葉書は、特に紙質を精選し、印刷の鮮明と彩色の艶麗なることは世上幾多の絵葉書を凌駕^{あたへ}し、価の廉なるは絶後とは言へませんが、確に空前の二字を冠すとも差支へない位である⁶⁵。

「逸品」が「廉」であること。第一点については、他の版元の絵葉書と較べると、決して唯一であるとは言いきれない。凝りに凝った絵葉書を売りにした文禄堂や、精巧な作家絵葉書をそろえる寸美会など、手の込んだものを発行する版元は他にもあった。蒐集家小竹忠三郎は日本葉書会を評して「各種の組物及び懸賞画を続々刊行して、比較的廉価に供給したのは日本葉書会で、此の低売多捌の遣り方は、絵葉書相場に一革新を来たした」⁶⁶と述べている。日本葉書会が強みとしたのは、「斯道の大家として名声隠れなき日本画家若くは洋画家」たちによる「各種の組物及び懸賞画」の刊行点数と、石版多色刷りの印刷技術にあったと考えられる。

印刷技術の向上は、大量印刷を可能にする。『風俗画報』では、価格の安さと「数でこなす」傾向が次のように述べられている。

日本葉書会即ち小石川久堅町の博進社工場（博文館の印刷工場）にて一組毎に五千宛^{すつ}印刷するが最も〔発行〕数の多き方なり、同会より出版さるゝ絵葉書は印刷多数なるを以て、値段も他に比較して廉なり、且つ博文館の關係上、知名の画工、筆を執らるゝより自から販路も広き訳なるが、所謂数でこなす方とて、(…) 頗る凝つたものとか精細目を驚かす底のものは出版せられず⁶⁷

同記事によれば、他の版元はたいがい1組につき1000～3000部程度の発行だという。コンスタントに5000部ずつ、というのは確かにかなり大部数である。それらの絵葉書は、市内各所で販売されると

ともに、地方からの注文も受け付け、広い販路で販売されることとなった。

「斯道の大家として名声隠れなき日本画家若くは洋画家」、すなわち著名な画家の作が地方においても入手可能であり、安く購入できたこと。このように、画家のネームバリューを活用したことが、日本葉書会の特色であると言えよう。次に示す文章は、先の絵葉書展覧会に陳列された絵葉書——和田英作、岡田三郎助、鹿子木孟郎、満谷国四郎、藤島武二、太田三郎による《清驕》6枚1組の広告である。日本葉書会の美術絵葉書の特色をよく示しているだろう。

絵葉書展覧会を開いた時の忘れ形見は此の清驕です、日本画洋画共現今の六大先生に御揮毫を願ひまして、展覧会場内に目が覚めた様に美しく飾られたのは、定めし大方の諸君も御承知でしょう、それで日本画の分は曩に黄菊白菊と題して世に出しましたが、誰も彼も我れ先きにと御買ひになりました、今度は洋画の分を最も美しい三色版に上せまして発行いたしました。これは洋画ですから、浮き立つ様に雅趣に富んで居ます、恙う大家揃ひの絵葉書は前きに出た事はなく、後にも出る気遣ひはありません、これは絵葉書を好く人の最好の記念になる許でなく、各画用として手本にするには全くこれに超したものはありません、又、新年の贈答品として此の位優美高尚で恰好のものはありますまい、願くは品切とならぬ中に一日も早くお買求めを願ひませう⁶⁸。

3. 水彩画

水彩画ブーム

水彩画の流行は、1900年代はじめから徐々に高まっていった。大下藤次郎『水彩画の葉』の出版をかわきりに、水彩技法書が続々と出版され、1905年には水彩画という意味の「水絵」を冠した専門誌『みづゑ』も創刊された。よく知られているように、水彩画家中川八郎はこの時期を「水彩画の全盛時代」と呼び、次のように述べている。

三十六年から七年八年丁度日露戦役の前後あの頃が日本の過去に於ける最も水彩画の全盛期であつた。其の最も流行児は三宅、大下、丸山の三君で其の作品が盛んに絵葉書等に印刷されて其の名が喧伝され且つ水彩画の趣味が普及された。それにつれて此の頃から素人で水彩画を描く人が追々に出来始めたのである⁶⁹。

「最も流行児」に数えられた三宅克己は、その人気について回想を残している。大下藤次郎・三宅克己・丸山晚霞といった水彩画家たちの仕事が、雑誌や技法書、そして絵葉書といった複製メディアを通じていかに熱心に受け入れられたかが伝わってくるだろう。

それは明治三十六年頃の話だが、この頃より自分の作画は、漸く世間に認められ、又実際に用いられることゝなつた。その内今度は博文館から、女学世界の口絵を毎号是非頼むと云ふことにな

り、続いて中学世界、文章世界等、私の水彩画は毎月各種の雑誌の口絵に発表されるようになったのである。（…）その頃大下藤次郎君は、素人画家の爲め『水彩画の栞』を出版され、これが大当り、続いて私も亦大橋光吉氏の依頼で、『水彩画の手引』なる水彩画独習書を出版し、又これが大当り。蓋し水彩画の学生間の流行は、この時程隆盛を極めた時代は無からうと思ふが、丸山晚霞君の水彩画書にしても、亦絵葉書にしても、底抜けの大歓迎。私共水彩画家の大得意思ふ可しであつた。（…）当時私の平凡な画論も、如何にその頃の青年学生諸君を感動させたかは、今思ひ出して、寧ろ不思議に堪へぬ思がされるのである⁷⁰。

出版物を通して作品を鑑賞すること、そして自ら描くこと、この鑑賞と実践の二つの行為が結びつきながら、水彩画の人気は高まっていった。全国各地でにわか水彩画家が誕生したが、そのありさまは、「吾輩は猫である」の苦沙弥先生についての記述からもうかがわれる。

此主人がどういふ考になつたものか吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはたゞしく帰つて来た。何を買つて来たのかと思ふと水彩絵具と毛筆とワットマンといふ紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間といふものは毎日々々書斎で昼寝もしないで絵許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない⁷¹。

漱石は自分自身も水彩画を描き、絵葉書にしたてて友人に送っている⁷²。水彩画のもたらした自ら描く喜びは、絵葉書というメディアと親和性の高いものであった。

水彩画と絵葉書

水彩画と絵葉書の関係には、二つの種類がある。すなわち、著名な水彩画家の絵を印刷した絵葉書と、愛好家の間でやりとりされた自筆絵葉書である。水彩画ブームと絵葉書ブームとは手をたずさえて、ともに流行に拍車をかけたと言っても良いだろう。

著名な画家の水彩絵葉書は大きな需要を生んだ。小竹忠三郎によると、水彩絵葉書の発行者は「三十七年には尚友館と石敢堂位であつたが、其後漸次発展し日本葉書会、便利堂、松聲堂、徳田、三星堂杯で盛んに刊行した」⁷³という。

日本葉書会による水彩絵葉書は、大橋光吉と大下藤次郎作水彩画との出会いからはじまったらしい。次のような逸話がのこっている。

その当時私が友人から貰った、大下藤次郎画がくところの絵はがき形の風景画を所持して居りましたので、或る朝 [大橋光吉] 翁の山の御宅（…）を御訪ねして大下藤次郎の絵はがき画を御目にかけましたところ、それを繰り反し繰り反し御覧になって、是れを私に呉れないか、絵はがき



図13 三宅克己水彩絵葉書，日本葉書会

に印刷して見よう，とのことである⁷⁴

同会は下藤次郎の《山紫水明》など、水彩絵葉書を続々と刊行しはじめた。なかでも三宅克己は多数発売され、またたくまに大人気となったようだ（図13）。三宅の回想から引用しよう。

大橋光吉氏経営のはがき文学社より，水彩画風景絵葉書など依頼され，発行すれば何れもが羽が生へて飛ぶやうに歓迎され，各所の絵葉書商より生仏の如く掌を合せて拝み倒されたのも，この頃の事であつた。（…）戦争中にも不拘，私の風景絵葉書は，素晴らしい勢で天下に横行した⁷⁵。

水彩絵葉書の勢いは留まるところを知らないかのようである。絵葉書商にとってはまさに水彩画家様々であろう。水彩画に目覚めた人々は，絵葉書を通して憧れの先生の絵に触れようとした。たとえば丸山晚霞に教えを受けた平澤大暉は，後年その店頭での出会いを語っている。

明治三十七八年頃日露戦争 ^{たけなわ} 酣 なりし頃から，私が中学を卒業する迄の間，行つけの本屋に行く度に三宅，丸山，大下の三大家の水彩の絵葉書が次々と新しい石版画になって店頭の額の中に光り輝いていた。「また新しいのが出来ました」と馴染の本屋の主人が自慢気に，自分が出版元でもあるかのやうに，語るのが常だったが，全くそれを見るのが楽しみで嬉しい極でもあった。（…）それから私が上京して日本水彩画会の研究所に入学して，初めての月次会で丸山，大下両先生に新しくお目にかゝれた時には，これがあの絵葉書の先生!!!と感激ふかいものがあつた⁷⁶。

平澤は北海道の出身であり，地方においても水彩絵葉書が本屋に並んでいる様子がうかがえる。後年水彩画家として名をあげる水野以文もまた，上京前の浜松にいた時分，「当時非常な勢で流行して居つた絵葉書熱に，[丸山晚霞]先生の御作は大抵買ひ集めて持つて居つた」⁷⁷と回想している。

絵葉書を描く喜び

水彩画家に憧れた彼らは，自らも筆を執り，絵葉書を描き送った。絵葉書ブームは，水彩画を描くきっかけとして非常に大きいモチベーションとなったと言えよう。1909（明治42）年に発行された大日本国民中学会編『絵画独習書』は，その美術普及に果たした役割を次のように記している。

三四年来、絵葉書が非常に流行しだした。そして此絵葉書は単に娯楽に用ゐられたばかりでなく、美術普及と云ふ点に於て非常なる貢献をした。それは何であるかと云へば、之に伴つて水彩画が驚くべき勢で盛になつたことである。(…)画に多少の心あるものは、筆にて水彩画を弄るやうになつたのは、因^{もと}はと云へば絵葉書流行のお蔭と云つても差支えない位である⁷⁸。

水彩画ブームにおける絵葉書との親和性は、これまで水彩画の歴史のなかでしばしば指摘されている⁷⁹。水彩画ブームの立役者、大下藤次郎は水彩画が絵葉書に最も適當であると断言している。

△近来絵葉書の流行に連れて、交際を望む人が多くなつて来たが、広く集めるうちには同じものが二枚も三枚も来る恐れがある。／△自筆の絵葉書には此弊がない。同じ題目、同じ物体を写しても絵には幾分か異つた点がある、随て印刷されたものよりも趣味が饒かである。／△自筆絵葉書は仮令絵が巧でなくても、慥に至情が籠つてゐるため、貰つたものも一層有難味を覚える訳である。／△この様な理由からして、自筆の絵葉書は今後ますます流行することと思ふ、(…)／△絵葉書をかくには水彩画が一番適當である。(我田引水ではない)油絵は面倒であるし、鉛筆画は磨れる恐れがある、日本絵では旅行先などの真景を伝えるに充分でない⁸⁰。

自分のアルバムを自らの手描き絵葉書で飾りたい、また人に送りたい、という欲求は、新しく絵画を学びはじめた動機ともなった。おそらくこうした動向を受けてのものだろう、日本葉書会も会員を対象に、「自作の絵画図案」を送って指導を受け、優秀者は『ハガキ文学』に掲載されるという「あかつき会」という団体をおこしている⁸¹。

こうした自作者は、画家を目指すような人々ばかりでは決してなかった。苦沙弥先生と同様、職業につながるような技術がなくとも、描くことそれ自体の楽しみが広く共有されたのである。たとえば、『みつゑ』の読者の一人は、「一生の娯楽」と題して次のように述べる。

一昨年の夏頃から絵葉書の流行のためか水彩画を描く友が急に殖えました、私も其の潮流に乗りましたが、友と戸外写生しても下手の一人であります、私は画才を持たぬのでせうが、而し失望はしません、決心はやゝ固くあります、私は専門家とならうとは思ひませんが、一生是を娯楽としようと思つて居ります⁸²。

自筆絵葉書は、文章や字に自信のない者にとって魅力的なコミュニケーションであつた。以下は『新小説』に掲載された「スケッチ画旅行途上」というお題の投稿書簡文であるが、当時の学生の子が伝わってくるだろう。

文才の無い僕！ 字の拙い僕！ 手紙だの通信だの云ふ事は、到底、良く為し得る所に非ずだ。

で、其の代りに……と云ふのも、可笑しいが……行くさきざきの風光は、絵端書に製造して（？）送らうから、文句は無くとも、それが僕らの消息だと、思ツて呉れ玉へ。（…）そこで、其の絵端書を見て、「下手な絵だなア」なんて、例の悪口は云ひツこ無しに願ふ。是だけは特に断はツて置くぜ⁸³。

水彩技法書

こうした自筆派にとって大いに助けとなったのが、続々と出版された水彩技法書である。そもそも水彩画ブームは、大下藤次郎の技法書『水彩画の栞』に端を発したものであった。技法書を手引きに、専門的な訓練がなくとも親しめた点が、ブームを拡大させる要因であった。

日本葉書会もまた、1905年末刊行の三宅克己『水彩画手引』（図14）を嚆矢として数々の技法書を出版した。その刊行のいきさつについて、三宅は大橋光吉から次のように提案を受けたと述べている。

君何うです。水彩画を印刷為て夫れに説明様のものを附して出版されては如何ですか。最早世間には沢山同様な著書はあらうが、又君は君として幾分なりとも違ふた考へがあらうから、一つこの際奮発して遣つて見ては何うです、石版印刷は出来るだけ金を懸けて見ます⁸⁴。

三宅は『水彩画手引』の自序に「本書は独学によりて水彩画を学ばんと欲する諸士の為に著したるものなれば、その説く所なるべく平易簡明ならむことを期したり」⁸⁵と記し、独学者に向けた点を強調している。それゆえか、『水彩画手引』は1906年夏には「出版界空前の大好評を以て初版数千部を尽し再版又茲に品切を告げんと」⁸⁶したらしい。

この『水彩画手引』の図版は、すべて絵葉書の大きさにあり、そのまま《水彩十景》絵葉書として

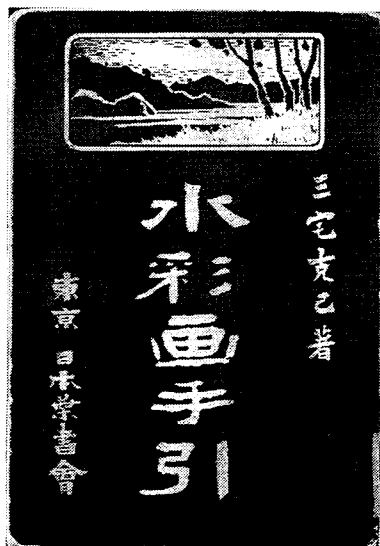


図14 三宅克己
『水彩画手引』
日本葉書会、1905年

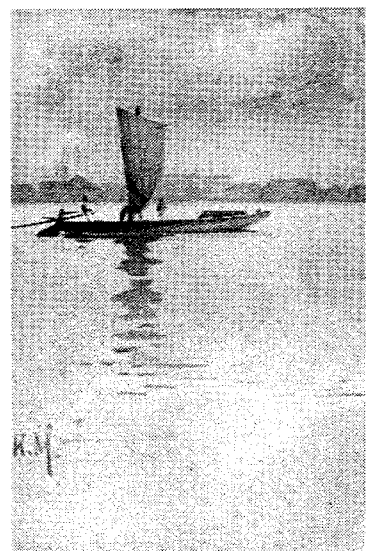


図15 三宅克己
《水彩十景》
日本葉書会

出版された（図15）。日本葉書会は水彩画ブームをうまく絵葉書や書籍の出版に取り入れたのが、ここではその関係性がよりいっそう強められている。

1906年以降、日本葉書会は多くの水彩画関連書籍を出版しはじめた。三宅の『旅行とスケッチ』『水彩画指南』『水彩画譜』、丸山晚霞の『水彩画法 女性と趣味』、吉田博『写生旅行』、大下藤次郎・石川欽一郎らによる共著『最新水彩画法』、また多数の画家の参加した『描法自在水彩習画帖』など、水彩画家として著名な作家の書籍を次々と出版した様子が見える（表3参照）。

表3 日本葉書会・精美堂出版目録（刊行年月日順）

タイトル	著者	出版元	刊行年	定価	備考
万国葉書帖	日本葉書会編輯局編	日本葉書会	1905.08	16銭	
水彩画手引	三宅克己	日本葉書会	1905.12	特製90銭・並製75銭	14版（1909.6時点）
画道一斑	中村不折	日本葉書会	1906.01	85銭	3版（1909.6時点）
絵葉書趣味	日本葉書会編輯局編	日本葉書会	1906.07	35銭	再版（1906.12時点）
絵画講話	ヴァンタイク著、橋元春郊訳	日本葉書会	1906.08	65銭	
旅行とスケッチ	三宅克己	日本葉書会	1906.12	55銭	
東京写真帖	田山録弥（花袋）	日本葉書会	1907.05	1円50銭	
鉛筆画法	中村不折	精美堂	1907.06	65銭	
水彩画法女性と趣味	丸山晚霞	日本葉書会	1907.07	2円	
写生旅行：アフリカヨーロッパアメリカ	吉田博	日本葉書会	1907.09	特製1円50銭・並製1円20銭	
水彩画指南	三宅克己	日本葉書会	1907.11	65銭	再版
泰西名画鑑	木暮理太郎	日本葉書会	1908.03	95銭	
箱根紀行	田山録弥（花袋）、挿図木版：小林鐘吉	日本葉書会	1908.06	35銭	
画事入門	梶田半古述、益田一郎記	日本葉書会	1908.11	1円	
最新水彩画法	石川欽一郎他	精美堂	1909.06	上製1円・並製65銭	再版（1910.11時点）
スケッチ画集（第2輯）	日本葉書会編輯局編纂	精美堂	1910.05	55銭	
草花絵物語	太田三郎	精美堂	1911.02	1円50銭	
彫刻真髓	荻原守衛著；中村不折編	精美堂	1911.04		
ひこばえ：小品画集	太田三郎	精美堂	1911.06		
水彩画譜：精巧木版	三宅克己	精美堂	1911.09	1円20銭	
金色夜叉画譜	尾崎紅葉原著、太田三郎編画	精美堂	1911.12	1円20銭	
蛇の殻 小品画集	太田三郎	精美堂	1911.3	85銭	
朝霧：俗謡画集（上下）	太田三郎	精美堂	1912		
みづ画を学ぶ人へ	三宅克己	日本葉書会	1921		
鉛筆スケッチ集画帖（全12冊）	橋本邦助／岡野榮／渡邊審也／和田三造／野田道三／小林鐘吉／太田三郎／本多穆然／佐藤生巢／中澤弘光／齋藤五百枝／山本森之助	日本葉書会	[～1907.5]	1冊25銭	
塑像と石膏	牧野等著、新海竹太郎序文	日本葉書会	1905？	30銭	
描法自在 水彩習画帖（全6冊：第一輯・三宅／第二輯・丸山／第三輯・大下／第四輯・三宅／第五輯・丸山／第六輯・大下）	三宅克己、丸山晚霞、大下藤次郎	日本葉書会	4輯まで～1906.1	1冊35銭	原画6枚線画6枚
スケッチ画集（第1輯）	日本葉書会編輯局編纂	精美堂		45銭	6版（1910.11時点）

こうした出版について、『ハガキ文学』誌上では、業務拡張の一端として「絵葉書及絵葉書附属品と同時に美術、絵画、文学等に関する有益にして美麗なる単行書籍の出版をも兼ね行ふの希望に有之候」⁸⁷と発表されている。その背景には、ブームの沈静とともに訪れるであろう絵葉書人気の陰りを察し、次なる商品を提供する必要も垣間見える。

これらの書籍は、『大橋光吉翁伝』においては「何れも極めて良心的な出版であって、その中の二三はとくに清新の気に富み、しかもその用紙、印刷、装釘など、すべて当時の出版界を代表するものである」⁸⁸とされている。実際、たとえば丸山晚霞の『水彩画法 女性と趣味』について、のちの水彩画家吉田豊は「群を抜いて立派なものであつて盛り上がりたつゝあつた水彩熱に拍車と云つた形であつた」⁸⁹と回想している。

水彩絵葉書のもたらしたもの

水彩画の流行は、絵を描く手段のバリエーションが単に増えたというだけに留まらない。その背後には、水彩画による風景画の盛行がもたらした、自然に対する新しいまなざしの獲得があった⁹⁰。青木茂は「絵はがきの流行は絵を描く楽しみを一般化したこととともに日本人の自然観の形成に影響を持つ一つの「事件」ですらあった」⁹¹と指摘する。たとえば大下藤次郎は、一般の人々にむけた「水彩画に就て」という文章において、「自然の絵画」を理解するために、絵画を学び美術眼を養うことを勧めている。

宇宙間あるとあらゆるものは総て自然の絵画で、吾々は大きな絵画の中^{うち}に住んでゐるのであります。此大なる絵画を見る美術眼を持つてゐなければ、折角な此自然の絵画の美しいことが充分に解することが出来ませぬ。それで此自然の絵画を解するには絵画を学ぶより外なからうと憶ふのです、(…)⁹²。

先に引用した森口多里の「教室での臨画から始めて開放されて野外の自然を略写する喜び」は、こうした自然観の変容を反映したものであろう。この新しい自然観は、教室から野外へ出て、直接自然と向き合い、自ら描くことを可能としたのである。

日本葉書会の水彩絵葉書も、水彩技法書も、背後にはこうした自然に対する新しいまなざしをそなえていたはずである。たとえば丸山晚霞の絵葉書《山と水》は、次のように広告されている。

今回又丸山先生に囑して、地はみすゞからう信濃の国の山水明媚風徐に吹き来つて溪水岩を啗む所、先生此の自然の趣に憧れ思はず熱烈の筆を駆れば自然の風色はなごりなく、その艶麗の筆と色彩の美を待つて流麗顕れ出でゝ些の遺憾なし⁹³

自然の趣を前に思わず筆を駆る、こうした画家のふるまいを、素人水彩画家たちが自分の姿と重ね

あわせただろうことは想像にたやすい。鑑賞者もまた、その自然に対する姿、その新しいまなざしに共鳴しただろう。岡本一平は、水彩絵葉書のはたらきについて次のように述べている。

若き民衆は是等により有産階級の人々が床の間にて玩味賞讃する意味のものを容易く机上也にたらしめて渴きを癒やす事が出来た。手本にして模写したりした。民衆に洋画に対する親しみを与へた事は展覧会などより余程この方が有力だったと思ふ⁹⁴。

水彩画ブームが青年に与えたインパクトとその広がり、絵葉書ブームによってもたらされた「民衆」との関連から眺めることでよりはっきりと浮かび上がる。

4. おわりに——日露戦争下の絵葉書

老若男女の美術

絵葉書は日露戦争下の社会で瞬く間に広がり、多くの人々の心をとらえた。日本葉書会が、絵葉書ブームを水彩画ブームと結びつけながら人気を博していった様子は、これまでに見たとおりである。同会の活動は、青年や学生の上に絵葉書や水彩の趣味を浸透させ、そのためのメディアを提供し、より一層の加熱を呼ぶ役割を果たしたといえよう。

それでは、日本葉書会のこうした活動を、日露戦争という社会状況とあわせて考察すると、どういった様相が見えてくるであろうか。

絵葉書の流行については、『ハガキ文学』において様々な歓迎の意が表されている。たとえばのちに『国民性十論』を著す国文学者芳賀矢一は、絵葉書を「最も低廉な美術工芸品」と表現した。

絵葉書は美術と実用との両方面を兼ねたもので、一種の美術工芸品である。しかも最も低廉な美術工芸品である。多くの美術工芸品は頗る高価なもので、富裕な人でなければ、賞玩する事が出来ないが、絵葉書は貧乏人でも、小供でも容易く、手に入れることが出来て、これ程安く、これ程高尚な娯楽を供給するものは外には無からうとおもふ⁹⁵。

低廉であること。これは、老若男女に対して門戸を開くものである。それでいて高尚であること。この両者を兼ね備え「最も低廉な美術工芸品」である絵葉書は、「老若男女の美術」として、「美術思想の涵養」が期待された。

絵葉書の流行は大に喜ぶべき現象であらうと思ふ。確かにこれが美的思想を涵養するの一助となつて、少なからぬ趣味普及の手段となる事を信ずるのである。世にこれ程廉価な美術がない、そしてこれ程ポピュラーな美術がない、たとへば美術上の趣味などの少しもない人でも、屢々絵葉書を手にする中にはいつか知らず知らずの間に絵画に関する智識を得て、昔世にあつた美術家に

名画の一般や、又は今現に世に行はれてゐる画風の一般を知ることが出来て、陰約の間に審美思想を涵養して行くのである⁹⁶。

絵葉書を通した「美的思想の涵養」という理念は、たびたび低廉・上質をうたい、地方にいたるまでの趣味の普及を積極的にすすめた日本葉書会の活動の中心をなすものであろう。大橋光吉は『ハガキ文学』「発刊の辞」において、絵葉書の洗練によって「直接には受信者の慰藉たり、間接には人性を純粹にする」ことをかけがいが、この啓蒙的な意図は数々の出版物によってある程度達成されたのではないかと考える。たとえば丸山晚霞の著書『水彩技法 女性と趣味』を、森口多里は「初学者に水彩画の技法を教えるばかりでなく、女性の教育にとつても体育にとつても美術が役立つといふ信念から、自然美に対する愛を説き、所謂「高尚優美の趣味」の啓発に努めた著述であつた」⁹⁷と評している。

もちろん、これは、日本葉書会が非営利的であつたと意味するものではない。むしろ、こうした理念が当時の社会に広く受け入れられたがゆえに、薄利多売の発行物が好評を博し、業績を伸ばすことができたと考えられる。

日露戦争のもとで――「国民」と「美術」と

こうした幅広い受け手に対する「美術思想の涵養」という理念は、日露戦争の戦時下から戦後経営へとうつりゆく社会において、どのような意味を持ち得ただろう。法学士寛信山は、日露戦争も終盤の1905年春、絵葉書の特性について次のように述べている。

目あきでも目なしでも男も女も老人も貴人も賤民も都人も鄙人も一様に楽しめる、馬上でも船上でも食卓上でも路上でも戦場でも議場でも教場でも工場でも然も夢の中でも転んだ拍子にでも出来る、即ち時と所に通じて普通一般に出来るからハガキ文学美術は国民普通の発達と大関係がある（…）⁹⁸。

あらゆる階層・あらゆる状況の老若男女は、ここでは「国民」と言い換えられている。寛はまた同じころ、絵葉書を介して「国民」と「美術」とを結びつけ、その発展を説いている。

国民の感情を養成し、国民の活動を定め、国民に生活与へるものとして、美術家の天職は大いなるものだ。殊に絵葉書の如き普通一般に行き渡り、孰れの時にも善く国民の美的活動を利用さるべき美術品は、国民の感情を知らず知らずの間に養ひ、国民の性格を暗示に依り自ら発展せしむる上に大勢力を有して居る。（…）さり乍ら此間にあつて尚絵葉書美術家は只自己の営利のみを計らずして、国家の爲め人類の爲めに、公衆一般に必要欠くべからざる自然及び自我の知覚を養ふを勉め、或は既に一般に存する必要なる知覚国民の特色を発揮するを忘れてはならぬ、唯外

国の弊風を学び妙なるまねを為すのみでは賛成出来ない。之れと同時に絵葉書を玩ぶ者も亦常に美術家に依頼せずして、自ら進んで国家人類の活動に必要な美的感覚を養成し、加之美術家をして健全ならしめ、健康なる平民的美術の一たる絵葉書を製作せしむることに注意せねばならぬ⁹⁹。

この「国民」と「美術」との関係がもつ意味をくみとるには、日露戦争の遂行にあたって、官民軍一体となった挙国一致の掛け声が鳴り響くなか、戦勝国の「国民」としてどうあるべきかという議論がさかんにたたかわされている状況を思い描いておく必要があるだろう。日本における「国民」意識は、明治時代初期から「天皇の臣民」として形成されるようおしすすめられていたが、日清・日露戦争という二つの戦争を通していっそう強まっていった。日露戦争の勝利は、一等国、また文明国の「国民」という新たな肩書きを与えることとなる。

こうした風潮のなか、「美術」は、どのような意義を有しただろうか。冒頭に引用した中村不折『画道一斑』は、読者へ向けて「美術」の効用を次のように説く。

兎に角美術が人の品性を高尚にする、人に一種の慰安を与へるといふことは、即ち美術本来の目的であるといふてもよかるふ。(…) 其辺に立て居る樹木、流れて居る水、これが美術といふ方面の考へがない者から見れば、何でも木と石であるけれども、見方によつては非常な価値のあるものとなる、(…) 美術品に対する時のみならず、天地間のすべての物を美的に見るように進歩する。(…) 之を大きく一国に適用して見ると、美術は実に文明の代表者で、少なからず一国の品位を高める。世界の文明国といへば、屹度美術も高等の地位に進んで居る、フランス、イギリス、ドイツ等、政体も軍備も學術も美術も平等に高等の域に進んで居る。(…) 印度や波斯などいふ亡国は、技術も随つて滅亡して居る。阿非利加や南洋の土蛮などは、野蛮的に武器などを飾るけれども、素より美術など称すべきものゝ有らふ筈がない¹⁰⁰。

文明国では、「美術」を尊ぶものである。「美術」の無い国に、文明国は無い。戦争に勝利して一等国の仲間入りをし、晴れて文明国を標榜する暁には、「国民」をあげて「美術」の普及と趣味の向上に励む必要がある。およそ「美術」は、文明国のあかしである——こうした主張は、ひとり不折のものではなかった。多くの識者が述べており、広く共有されていたと考えてよい。幅広い対象における「美術思想の涵養」という理念には、拡大する国家意識の影を見て取ることが可能である。

日本葉書会の活動には、こうした言辞と気脈を通じ、文明国の「美術」を享受する「国民」というイメージを下支えする側面があった。こうした側面は、一概に善悪を断じたり、効果を判ずることのできる類のものではなく、よりいっそうの議論が必要である。しかし、少なくともこうした言説を作り出す側にあった日本葉書会にとって、十分なインセンティブとなっただろうことは想像に難くない。日本葉書会のこうした側面は、日露戦争下において、なぜ絵葉書ブームと水彩画ブームが過熱し、

「洋画」趣味が普及していったのか、というより大きな問いに一つの展望をもたらすものである。

【付記】

本稿は、口頭発表「絵葉書ブームと美術の普及—日本葉書会・精美堂の出版活動を中心に—」（早稲田大学美術史学会第1回例会，2007年11月）に基づき、改稿したものである。

本稿を作成するにあたり、共同印刷株式会社坂本洋子氏、林丈二氏、林宏樹氏、山田俊幸氏には数々のご教示をたまわり、貴重な資料および図版をご提供いただきました。ここに記して、感謝の意を表します。

注

- 1 北澤憲昭『眼の神殿「美術」受容史ノート』美術出版社，1989年。佐藤道信『〈日本美術〉誕生』講談社選書メチエ，講談社，1996年。
- 2 Commission Imperiale du Japon, *Histoire de l'Art du Japon*, Paris, 1900. 帝国博物館編『稿本日本帝国美術…史』農商務省，1901年。
- 3 丹尾安典「1900年パリ万博と本邦美術」，明治美術学会編『日本近代美術と西洋 明治美術学会国際シンポジウム』中央公論美術出版，1992年。
- 4 中村不折『画道一斑』日本葉書会，1906年，6-7頁。本稿では引用文中の旧漢字を新漢字にあらため、適宜句読点・振り仮名を補い、□を用いて語句を加える。
- 5 「絵画界（三十三年—三十八年）（彙報）」『早稲田文学』6号，1906年6月，13-14頁。
- 6 森口多里『明治大正の洋画』東京堂，1941年，59-78頁。
- 7 日本葉書会については、主に以下を参照。浜田徳太郎『大橋光吉翁伝』大橋芳雄，1958年。『共同印刷百年史』共同印刷，1997年。生田誠『日本葉書会』（特集 絵葉書国人物誌[明治編]），『仿書月刊』2006年6月号。
- 8 『フィリップ・パロスコレクション 絵はがき芸術の愉しみ展—忘れられていた小さな絵—』図録，そごう美術館他，1992年。『ボストン美術館所蔵 ローダー・コレクション 美しき日本の絵はがき展』図録，日本経済新聞社，2004年など。
- 9 紅野敏郎「解題」，早稲田大学図書館編『「ハガキ文学」総目次』〈精選近代文芸雑誌集〉，雄松堂出版，2003年。
- 10 絵葉書については主に以下を参照。小竹忠三郎『日本全国名所葉書目録』小竹忠三郎，1911年。樋畑雪湖『日本絵葉書史潮』日本郵券倶楽部，1936年。小川寿一『日本絵葉書小史 明治編』表現社，1990年。佐藤健二『風景の生産・風景の開放』講談社選書メチエ，1994年。拙稿「通信省発行日露戦争絵葉書—その実相と意義—」『美術史研究』41，2003年12月。生田誠・山田俊幸『明治美術絵葉書』スモース文庫，2005年。岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館，2009年。
- 11 拙稿「絵葉書ブームにおける版元—1900年代の視覚メディアをめぐって—」『大正イマジネーション』3，2008年3月。
- 12 浜田，前掲注7，15-26頁。
- 13 浜田，前掲注7。および『共同印刷百年史』，前掲注7。
- 14 同前。
- 15 坪谷善四郎『博文館五十年史』博文館，1937年，191頁。
- 16 『ハガキ文学』1(1)，1904年10月。
- 17 浜田，前掲注7，18頁。
- 18 用度課新藤彊平「其頃の思ひ出」『協同』2(8)，共同印刷株式会社，1929年8月号，5頁。
- 19 『共同印刷百年史』前掲注7，52頁。
- 20 「月刊美術文学雑誌 ハガキ文学」三宅克己『水彩画手引』日本葉書会，1905年，広告2頁。
- 21 「会告」『ハガキ文学』2(18)，1905年12月，61頁。
- 22 前掲注16。
- 23 「反古籠」『ハガキ文学』1(1)，1904年10月，47頁。
- 24 若尾瀾水著，若尾瀾水遺稿編集委員会編『若尾瀾水俳論集』高知市民図書館，1967年。
- 25 若尾瀾水「編輯を辞するの詞」『ハガキ文学』2(2)，1905年2月，56頁。
- 26 『ハガキ文学』2(16)，1905年10月，79頁。
- 27 それぞれ以下を参照。『ハガキ文学』3(1)，1906年1月，後付4頁。『ハガキ文学』4(1)，1907年1月，後付1頁。『ハガキ文学』5(1)，1908年1月，後付1頁。
- 28 『都史紀要27 東京都の修史事業』東京都，1980年，64頁（鷹見安二郎「木暮先生と東京市史編纂事業」『霧の旅』54，1944年の再録）。

- 29 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史美術学部篇』ぎょうせい、2003年。
- 30 「会告」『ハガキ文学』2(18), 1905年12月, 61頁。
- 31 『ハガキ文学』1(1), 1904年10月, 50頁。
- 32 「社告」『ハガキ文学』1(3), 1904年12月, 47頁。
- 33 「日本葉書会支部及支部長」『ハガキ文学』2(3), 1905年1月。
- 34 「読者通信」『ハガキ文学』1(3), 1904年12月, 44頁。
- 35 森口多里『明治大正の洋画』東京堂, 1941年, 198頁。
- 36 前掲注30。
- 37 井荻草房主人「『ハガキ文学』とその投書家」『書物展望』4(8), 1934年, 145頁。
- 38 ハイカラ小僧「絵葉書店頭五分間」『ハガキ文学』2(10), 1905年7月, 広告2-3頁。
- 39 浜田, 前掲注7, 29頁。
- 40 『ハガキ文学』3(7), 1906年6月, 後付4頁。
- 41 川田久長『活版印刷史』印刷学会出版部, 1949年, 255頁。
- 42 国際間の郵便業務を円滑に遂行するため万国郵便連合が発足したのは1874年である。日本は1877年より加盟。
- 43 石井研堂『明治事物起原』橋南堂, 1908年, 258-259頁。
- 44 「記念絵葉書売出の混乱」『読売新聞』1906年5月7日。
- 45 山本笑月『明治世相百話』第一書房, 1936年, 50頁。
- 46 拙稿「巖谷小波」(特集 絵葉書国人物誌[明治編]), 『衍書月刊』2006年6月号。
- 47 巖谷小波「画葉書私感」『ハガキ文学』1(1), 1904年10月, 2頁。
- 48 巖谷小波『洋行土産』下, 博文館, 1903年, 226-232頁。
- 49 井出文子, 柴田三千雄編『箕作元八 滯欧「飯梅日記」』東京大学出版会, 1984年, 80頁。
- 50 箕作元八「外国の絵葉書界」『絵葉書大観』(『ハガキ文学』2〈5〉臨時増刊), 日本葉書会, 1905年4月, 84-85頁。
- 51 中澤弘光「さしゑ二三」『書物展望』5(10), 1931年10月, 356頁。
- 52 岡本一平『新しい漫画の描き方』先進社, 1930年, 178頁。
- 53 「社告」『ハガキ文学』2(2), 1905年2月, 61頁。
- 54 松本龍之助編『明治大正文学美術人名辞書』立川文明堂, 1926年, 133頁。
- 55 青木茂「渡辺亮輔, 佐藤生巢, 大野静方のことなど〈新・旧刊案内35〉」『一寸』35, 2008年8月, 9頁。
- 56 『ハガキ文学』1(3), 1904年12月, 45頁。
- 57 駿河 白雲「美術学校入学試験」『ハガキ文学』5(8), 1908年8月, 95頁。
- 58 荒畑寒村『寒村自伝』板垣書店, 1947年, 142頁。
- 59 「本邦未曾有金百円懸賞絵葉書図案募集」『ハガキ文学』2(1), 1905年1月。
- 60 染狂子「懸賞絵端書当選者山村耕花君」『ハガキ文学』2(17), 1905年11月, 59頁。耕花は尾形月耕の門で、この頃から古洞や清方らの所属する鳥合会に参加している。
- 61 絵葉書展覧会については以下を参照。「日本絵葉書展覧会」『読売新聞』1905年7月23日。「日本絵葉書展覧会(時報)」『研精画誌』22, 1905年, 9-10頁。『ハガキ文学』2(12), 1905年, 62頁。『ハガキ文学』2(15)。
- 62 増尾信之編『光村利澤伝』光村利之, 1964年, 271-275頁。『写真で見る光村印刷の95年』光村印刷株式会社, 1996年。
- 63 L S会は当時東京美術学校洋画科を卒業し、白馬会に所属した橋本邦助、斉藤五百枝、和田三造、辻永ら若手の画家たちの団体。Lはlight, Sはshadeを意味する。本展覧会の出品数は数千点と伝えられている(『時報』『美術新報』4(8), 1905年7月5日)。
- 64 望雲「小言大語」『美術新報』4(13), 1905年9月20日, 1頁。
- 65 「絵葉書(流行)」『文藝倶楽部』11(7), 1905年5月, 287-288頁。
- 66 小竹忠三郎『日本全国名所葉書目録』1911年, 6-7頁。
- 67 「絵葉書の流行」『風俗画報』318, 1905年6月, 26-27頁。
- 68 「洋画葉書 清驕」『ハガキ文学』3(1), 1906年1月。
- 69 中川八郎「水彩画の全盛時代」『みづゑ』135, 1916年5月, 29頁。
- 70 三宅克己『思ひ出づるまま』[三宅書房], 1936年, 161-165頁。
- 71 夏目漱石『吾輩ハ猫デアル』上, 大倉書店, 1905年, 9-10頁。
- 72 夏目漱石『漱石全集第18巻 日記』漱石全集刊行会, 1928年。古川久「漱石の未発表水彩画絵端書」『日本文学誌要』19, 1967年12月, 43-47頁。
- 73 小竹忠三郎『日本全国名所葉書目録』1911年, 12頁。
- 74 横田地巴「大橋光吉翁を偲びまつりて」浜田徳太郎『大橋光吉翁伝』大橋芳雄, 1958年, 313-314頁。
- 75 三宅克己『思ひ出づるまま』[三宅書房], 1936年, 161-165頁。
- 76 平澤大暉「晚霞芹」, 小山周二次編輯『水彩画家丸山晚霞』日本水彩画会, 1942年, 230頁。平澤は本名貞通, 帝銀事件の犯人と目された人物である。

- 77 水野以文「先生と田舎少年」小山周二次編輯『水彩画家丸山晩霞』日本水彩画会、1942年、223頁。
- 78 大日本国民中学会編『絵画独習書』東京国民書院、1909年、69-70頁。
- 79 水彩画と絵葉書の関係について参照した文献は主に以下の通りである。北澤憲昭「『風景』と『山水』」『みづゑ』936, 1985年。酒井忠康編著『近代日本の水彩画』岩波書店、1996年。青木茂『自然をうつす 東の山水画・西の風景画・水彩画』岩波書店〈岩波近代日本の美術8〉、1996年。原田光「旅と写生」、高階秀爾『水絵の福音使者 大下藤次郎 評伝』美術出版社、2005年。
- 80 大下藤次郎「肉筆絵葉書」『絵葉書大観』（『ハガキ文学』2〈5〉臨時増刊）、日本葉書会、1905年4月、105-106頁。
- 81 「見よ!!絵画研究者の福音!! あかつき会設立」『ハガキ文学』3(5)、1906年、90頁。
- 82 麻布 大塚幹「一生の娯楽」『みづゑ』11、1906年4月、5頁。
- 83 麴町 咲花子「スケッチ画旅行途上 参等（書簡文）」泉鏡花選『新小説』9(9)、1904年9月、268頁。
- 84 三宅克己「水彩画手引著作に就て」『ハガキ文学』3(1)、1906年1月、50頁。
- 85 三宅克己「自序」『水彩画手引』日本葉書会、1905年。
- 86 「今や水彩写生の好時節なり（広告）」『趣味』1(3)、1906年8月。
- 87 「会告 本会業務の拡張に就て」『ハガキ文学』3(11)、1906年11月、100頁。
- 88 浜田、前掲注7、45頁。
- 89 吉田豊「奈良の頃」、小山周二次編輯『水彩画家丸山晩霞』日本水彩画会、1942年、232頁。
- 90 北澤、前掲注79。
- 91 青木、前掲注79、78頁。
- 92 大下藤次郎「水彩画に就て」『月刊百藝雑誌』1(1)、1906年4月、80頁。
- 93 「水彩葉書 山と水」『みづゑ』8、1906年2月、後付5頁。
- 94 岡本一平『新しい漫画の描き方』先進社、1930年、180頁。
- 95 芳賀矢一「文学的絵葉書を作れ」『ハガキ文学』2(1)、1905年1月、25頁。
- 96 吉水樗堂「第四章 絵葉書の研究 第一節 絵葉書の趣味」『絵葉書大観』（『ハガキ文学』2〈5〉臨時増刊）、日本葉書会、1905年4月、34-35頁。
- 97 森口、前掲注6、78頁。
- 98 法学士寛信山「ハガキ文学ハガキ美術の特色」『ハガキ文学』2(3)、1905年3月、2-3頁。
- 99 法学博士寛信山「絵葉書に依る美的活動」『絵葉書大観』（『ハガキ文学』2〈5〉臨時増刊）、日本葉書会、1905年4月、15-18、28頁。
- 100 中村、前掲注4、6-7頁、14頁。